



食の安全をみんなで考えるために

やっぱりコミュニケーションが大切!!

食の安全・リスクコミュニケーション研究会では、「リスクって?」「食品の安全って?」「日本の食品行政は?」「生協はどんな役割を持っているの?」など、食の安全について昨年より話し合ってきました。4月26日(金)、まとめとして、3生協の理事、役職員、取引先、関係行政の皆さん、研究会の皆さん約140名の参加で東海コープ学び語り合う会が開催されました。テーマは「コミュニケーション」報告や発言の一部をご紹介します。

講演 内閣府食品安全委員会事務局 リスクコミュニケーション官 篠原 隆氏



食品安全委員会はリスク管理を行なう農水省や厚生省などから独立して平成15年に設置された組織です。リスクとは、**起きてしまった結果ではなく、私たちにとって良くないことが起こる危険度や結果予測の度合い、損害を受ける可能性**という意味を持っています。食品の安全には100%の安全ということはありません。リスクコミュニケーションは説得することでもないし、決定するというだけでもありません。リスクに対する評価・管理をどのように行なうのか決定する時に、リスクに対する正しい情報を共有し、意見交換をすすめることで、安心と信頼につながるものです。委員会ではHPでの情報公開や、さまざまなリスクコミュニケーションの取り組みを進めています。

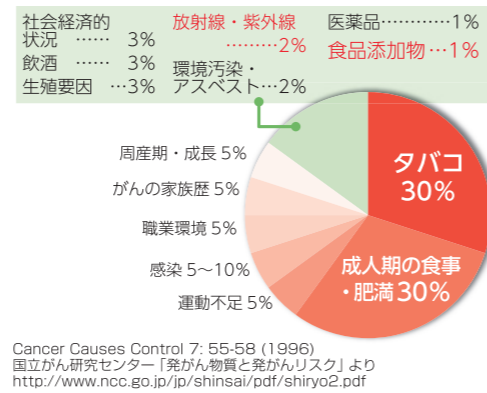
ハザード…健康に悪影響をもたらす原因となる可能性のある食品中の物質(危害要因)
O-157やノロウイルスなど生物的要因、食品添加物や残留農薬など科学的要因、放射線など物理的要因

リスク=ハザードから生じる健康への「毒性の程度」×「体に取り込む量」



毒性が強くても摂取量が少なければ健康危害は低いし、毒性が弱くても摂取量が大きければ健康危害は大きくなるのです。

がんの原因因子



研究会報告 名古屋大学大学院 生源寺 眞一氏(座長 文書報告)

生協は、メーカーの顔、産直を通して生産者の顔、消費者の顔を併せ持っています。リスクコミュニケーションとは、相互交流と相互理解ですが、実際の活動につなげることが大切です。東海の生協の「福島の桃」の取り組みは、組合員参加によって安全確保を実践し、消費者と生産者が相互理解のもと被災地の支援につなげた象徴的な取り組みです。生協など共助の組織には、社会貢献の意味もあり、他者への配慮に高い価値を見出すことが求められています。

研究会報告 名城大学 田村 廣人氏

食品安全委員会(農業専門調査会)に参加しています。一般的にリスクには関心が高いのですが、化学物質が持つ有効性は意外に関心が低いのが実態です。食品添加物でリスクと有効性を考える時、例えば、夏の食中毒シーズンを控えて食品添加物を使用するリスクを重く見るか、ボツリヌス毒素(食中毒の原因毒素)のリスクを重く見るか、天秤のバランスをうまく取っていかないといいません。

研究会報告 日本生協連安全政策推進室 鬼武 一夫氏

これまで生協は食品衛生法改正や食品安全基本法制定など、日本の食品安全行政に大きな影響と変化を作ってきました。日本生協連は、食中毒を起こさないこと、健康寿命を延ばすこと、生活の質を向上させることを食品安全の最も重要な視点にしてきました。「不使用」や「制限をする」ことが、「リスクが大きい」と誤解されないようにすることが大切で、安全と安心の乖離を解消するコミュニケーションの促進が必要になっています。

まとめ 東海コープ商品検査センター 技術顧問 斎藤 勲氏

生協の、リスク分析の導入と、農場から食卓までの一貫した対策には自信をもちたいと思います。家庭の食事からの放射性物質摂取量調査も実施しています。またコープふくしまの取り組みに学ぶ会の開催等、地道な調査も生協らしい取組として引き続き活動をすすめていきます。

2012年度 第13回理事会(5/9)だより

1. 4月期決算について承認しました。

《4月度事業結果》 (単位:百万円)

	4月実績	計画比(%)
商品の供給高	2,049	97.2
総事業高	2,109	97.3
事業経費	469	97.2
経常剰余金	0	3.6

組合員数 217,214名 計画比99.9% (加入908名)
出資金 38億7,506万円 一人当たり出資金17,840円

2. 総代会関連事項について

6月10日開催の通常総代会の議案書の内容について承認されました。

3. 機関・組織関連事項について

- (1)TPP、原発・エネルギー、社会保障・税の一体改革に関する意見表明について承認されました。
- (2)コープぎふの2020年福祉ビジョンの指針について確認されました。
- (3)今年度のピースアクションinヒロシマ・ナガサキの日程、募集について確認されました。

2013年 第9回「戦争体験聞き書き」作文募集

戦争経験者の高齢化と共に戦争の記憶が風化してしまうことがないように、当時の体験を聞き書きし、戦争時の様々な実相や体験を次世代に受け継ぎながら、平和の大切さを考える取り組みです。

■募集内容

戦争および戦時下の暮らし、終戦直後の動乱期の暮らしを体験された方から、その当時の様子をうかがい、聞き取った内容を文章にします。体験者ご自身の作文も可能です。

■応募条件

- 岐阜県内に在住またはお勤めの方ならどなたでも応募できます。
- 小学生の部……400字詰め原稿用紙1~2枚程度
- 中高校生の部……400字詰め原稿用紙3~5枚程度
- 学生・一般の部……400字詰め原稿用紙3~5枚程度

※応募に際しての注意事項

- 「お話をした方の氏名・年齢」「聞き書き者の氏名・年齢(小・中・高生、学生の場合は、学校名と学年も)」を記入願います。
- 応募は、お一人様何点でも可能です。
- 難解な漢字には、ふりがなをお願いします。
- 今までに、他に発表されたものは除きます。

■応募期間

2013年7月15日~9月15日必着(当日消印有効)

■応募方法

郵便番号、住所、氏名、電話番号をご記入の上、下記まで郵便またはメールでご応募ください。

■ご応募・お問い合わせ先

生活協同組合コープぎふ 組合員組織部「戦争体験聞き書き」作文募集係
〒509-0197 岐阜県各務原市鵜沼各務原町1-4-1 TEL:058-370-6873 e-mail:yamori@tcoop.or.jp (担当 千葉・森)

■その他

- ご応募いただいた作文は、文集にし(2014年1月予定)、投稿者全員にお渡しすると共に、県内公立図書館等へ寄贈、平和活動に活用します。応募者全員に参加賞を進呈します。
- 応募作品の返却はしません。投稿文の中から一部をコープぎふ機関誌、ホームページ、平和関係の資料、岐阜新聞に掲載します。

■主催

生活協同組合コープぎふ
共催 岐阜新聞社・岐阜放送
後援 岐阜県、岐阜県教育委員会、岐阜県原爆被害者の会

第7集 聞き書き集より

「母より聞きし父の事」 藤田 勲(68歳)
昭和十八年十月五日生まれの私ですが、父(三十三歳)は昭和十八年九月に(赤紙・召集令状にて)大垣より敦賀十九連隊へ入営。当時父は陸軍衛生軍曹でした。数日後父は戦地へ行く事に成り、母は臨月のため、見送りに行かず母の妹(小梅)にたのみ、私の姉(富士子)二才を連れて敦賀の駅へ最後の別れに行ってくれました。父は汽車が出て姉達の姿が見えなくなるまで手を振っていたと叔母(小梅)からいまだに聞かれます。父の心情を思うと泣けてきます。